第４分科会「安全・安心な地域づくり」

〔討議のテーマ〕

安全で安心な地域づくりに関する住民の意識の高揚と防災・防犯につながる活動の促進について

〔討議の柱〕

1　住民の意識の高揚
2　活動の促進

〔事例発表者〕	1	長崎県佐世保市立大久保小学校学校支援会議委員	富田　ミドリ
	2	宮崎県宮崎市木花地域婦人会副会長	茜ヶ久保眞由美
〔助言者〕		宮崎県宮崎市立恒久小学校校長	柳　和枝
〔司会者〕		長崎県教育庁生涯学習課社会教育推進班指導主事	椋本　博志
〔記録者〕		宮崎県教育庁北部教育事務所家庭・地域教育担当社会教育主事	阿部　泰宏
		宮崎県教育庁中部教育事務所家庭・地域教育担当指導主事	小川　充
〔分科会責任者〕		宮崎県社会教育委員連絡協議会理事	井上　源之助
〔会場総括〕		宮崎県宮崎地区社会教育委員連絡協議会委員	坂田　愛子
〔分科会事務局〕		宮崎県教育庁生涯学習課社会・家庭教育担当主幹	森山　欣一

Ⅰ　発表要旨

１　発表１「『共育』による地域の絆づくり　～安全・安心で住みよい地域をめざして～」

長崎県佐世保市立大久保小学校学校支援会議委員　富田　ミドリ

⑴　はじめに

ア　地域の実態

○　平成１６年度の事件を契機に地域住民が一体となって学校に関わり始め、学校支援会議の取組に対して内閣総理大臣賞を受賞

イ　学校支援会議の概要

○　目的を効率的に達成するための「基盤づくり」

⑵　活動の内容

○　６つの活動の内容報告

⑶　評価・成果

○　登校時の教職員と子どものハイタッチによるコミュニケーションの醸成

○　ふれあい運動会をとおした子どもの地域一員という意識の高揚

○　放課後子ども教室での異年齢交流、事業関係者と保護者との心のつながり

⑷　今後の課題

○　「つながる地域、元気な地域、安全な地域」を目指して地域住民に対する多様なアプローチによる地域の安全・安心づくり

○　過度な取組にならないことへの配慮

２　発表２「『安全・安心な地域づくり』　～誰も津波で死なせない～」

宮崎県宮崎市木花地域婦人会副会長　茜ヶ久保眞由美

⑴　はじめに

○　地域防災の取組が地域コミュニティの再生

○　東日本大震災、寛文２年外所地震の教訓を生かした自主防災の意識向上と実践

⑵　島山地区の自主防災隊の紹介と実践内容

○　地元に精通した様々な職、役職の方々で構成し適材適所で「顔の見える」組織

○　通常避難方法からアイデアを出し合い、個々の状態にあった避難ツールの発見

○　訓練から津波避難では「段取りと落ち着き」、各自がまずは逃げるという「津波てんでんこ」の重要性

○　全員存命のための行政に対するタワー建設要望と日常訓練の継続

⑶　地域づくりコミュニティについて

○　家族、親族だけでなく全ての人が一緒に避難することがコミュニティの原点

○　自助、共助、公助の精神をもとにコミュニティ再現の一例が自主防災隊

⑷　終わりに

○　子どもの心にコミュニティの大切さを感じるやさしい心の育成に努めたい。

Ⅱ　質疑応答

１　発表１について

Ⓐ 感想であるが、子どもたちを軸とした地域と学校の絆づくりが実践されており参考になった。〔長崎県〕

Ⓠ 放課後子ども教室は学校の教室を使っているのか。〔福岡県〕

Ⓐ 学校内で実施しているがボランティア委員の１３名が独立して行っている。様々な体験活動を企画し、実践している。〔発表者〕

Ⓠ 共働きの保護者のために、学校で残っている子どもたちをボランティアの方々が見てやっているのか。〔福岡県〕

Ⓐ 木曜日の午後３時から５時までの週１回、児童クラブと異なり、無料に近い状態で見ている。放課後子ども教室が終了後に児童クラブに行っている子どもたちもいる。〔発表者〕

Ⓠ 事件を契機に学校、保護者の認識、意識はどのように変わったか。

Ⓐ 地域づくりという視点で話を進めたいので、その質問については取り上げない。〔司会者〕

Ⓠ 朝、正門に教職員が立たち、登校してきた子どもとハイタッチをしているが、スキンシップにつながり見習っていきたい。〔宮崎県〕

Ⓐ 校長先生が最もはりきってされている。〔発表者〕

Ⓠ 小学校で学社連携を推進しているが、地域で活動している様々な団体の役割を学校支援会議で全て引き受けているのか。〔宮崎県〕

Ⓐ 学校支援会議のメンバーの中には民生委員、町内連合会長など、団体の責任者が多く、その方々が各団体に周知してくれる。学校支援会議は、各団体と横断的に関わっている。〔発表者〕

２　発表２について

Ⓠ 発表で避難に１８分と言われたが木花神社まで何分かかるのか。〔宮崎県〕

Ⓐ 木花神社まで様々な形で避難訓練をした。それぞれの家から避難してもらったが、時間も様々で、リアカーで４０分以上、若い子の自転車で１３分等。島山から木花の高台まで約１．５㎞〔発表者〕

Ⓠ 住民のそれぞれが避難方法を考えてやっているのか。〔宮崎県〕

Ⓐ 島山は南北に長く、海から８７０m。それぞれが自分の家から高台を探し、もっとよい方法を考えている。今の現状では助からない。〔発表者〕

Ⓠ 茜ヶ久保さん、発表で言い残したことはないか。〔司会者〕

Ⓐ 島山地区は５つの班に分かれ、それぞれで誰が誰を連れてどの方向に避難するか、介助の必要な方等を明確に設定し訓練を行った。また、若い方がいない場合や高齢者だけの場合も想定した訓練も実施している。〔発表者〕

Ⅲ　研究協議

1　討議の柱１について

Ⓐ （実践事例）ボランティアを募集して高齢者の見守りも兼ねて、高齢者住宅の粗大ゴミを出す補助を行っている。〔長崎県〕

Q 高齢者の見守り活動を実践されているところは挙手を願う。〔司会者〕

Ⓐ （挙手はほぼなし）

Ⓐ （実践事例）日南には防災無線がない。そこで地域福祉員がヤクルトを持って高齢者のお宅を回り、見守りをやっている。〔宮崎県〕

Q （町内、域内ではなく）個人宅に受信機がないと防災無線の意味がない。行政が頑張って設置してもらいたいが。〔宮崎県〕

Ⓐ 木花地区では防災無線が海側を向いて設置されていたが、陸側に向きを変えた。しかし、実際はそれぞれの家にないと聞こえない。そのため、台風の時は、窓を少し開けて、消防車の呼びかけを聞いているのが現状。行政に要望していきたい。〔発表者〕

Ⓐ 長崎市では、数カ年計画で防災無線を個人住宅に設置していく計画がある。まずは自分たちでやれることはやってみて、できない部分を行政に要望していくことが必要だと考える。〔長崎県〕

Ⓐ 綾町では、各戸に防災無線が行政によって設置されており、防災以外の様々な情報が受けられる。また、青パトでの学校周辺の見回りを行っている。〔宮崎県〕

Ⓐ 青パトの普及が進んでいる地域は挙手を願う。〔司会者〕

Ⓐ （多くの挙手があった。）

Ⓐ （実践事例）青パトでの見回りをしての成果は、子どもたちを知ることができるとともに、あいさつが返ってくるようになった。地域住民からも「ご苦労様」の声が聞かれ、嬉しい気持ちになる。〔宮崎県〕

Ⓐ （実践事例）「防災メールまもるくん」を市民に送信している。しかし、課題として高齢者が使いこなせないため、やはり防災無線の設置を考える必要がある。〔福岡県〕

Ⓐ （実践事例）竹田市では全戸に防災無線を設置している。豪雨等の際にはボリュームが最大になるようになっている。また、自治会独自の情報も流すことができ、地域活性化の一役を担っている。〔大分県〕

Ⓐ 木花地域婦人会では「地域の子どもは地域で育てよう」の考えのもとに、子どもを預かり、面倒をみている。子どもたちの安全保険をかけたいので、その点は行政に要望していきたい。その他、高齢者への寿司、果物を一軒一軒配付し、見守りを実践している。〔発表者〕

２　討議の柱２について

Ⓐ （西都市黒川地区）県防犯連合会の事業指定で実践した活動を継続して、子どもの下校見守りを実施している。地区の３２％は高齢者であるが、６５歳以上の３００名が「輝き隊」を組織して活動。午後３時から午後４時、地区７カ所に２名ずつが立つようにしている。高齢者の生き甲斐となる活動となっている。

課題は、子どもが減少し、見守りの必要性が薄れてきていること。また、輝き隊の隊員の体調不良が多く見られはじめたことである。〔宮崎県〕

Ⓐ 学校関係者であるが、本校では地震、津波対策として家庭との連携・主導で避難訓練を２回実施した。学校から地域へのアプローチとして自治会長や宮崎地域再生会議、警察、消防等にお願いして避難訓練を実施し、下校途中に立ち会ってもらい危険箇所のチェック、第一次避難場所の公民館へ避難する実践を行った。〔宮崎県〕

Ⓠ 木花地区と木花小学校の連携はどのようになっているか。〔宮崎県〕

Ⓐ 東日本大震災を受けて、危機感をもった。

まず取り組んだことは避難訓練、避難場所の見直しを行った。次に「自分で自分の命を守れる子どもを育てたい」ということで、学校・子どもと地域をつなぐことを考え、地域の各団体との連携を図った。防災ネットワーク会議の実施、地域の方と学ぶ場の設定（ワークショップ）、町探検で協力してもらう防災教育の実施等、子どもの学びの中に地域の方に入ってもらった。〔助言者〕

Ⓐ 自分の住む町で本日出された様々な実践がされているかと問い直し、改めて自分たちができることを考えていきたい。その中で日常の「あいさつ、声かけ」が重要となり、緊急時の原動力となるのではないか。〔宮崎県〕

Ⓐ 日南市ではあいさつプラス「一言」運動を推進し、コミュニティの形成に努めている。〔宮崎県〕

Ⅳ　まとめ

1　はじめに

○　安全・安心な地域づくりは地域住民にとって一番の願い。

○　登下校の事件・事故の多発、東日本大震災の発生等で防犯防災の意識は高まったが、実践に地域差

2　事例発表について

⑴　長崎県佐世保市立大久保小学校学校支援会議委員の事例発表

ア　学校支援会議のよさ

○　目的が明確である。

○　６つの活動内容の視点が整理されている。

○　保護者や地域住民が学校支援会議を窓口として学校とともに子どもを育成していくことが感じられる。

イ　全体的なよさ

○　学校と各団体の代表者が集う学校支援会議が毎月子どもを話題に話し合い、その内容を再度各団体に持ち帰ることで、地域全体で子どもを育てる気運が高まったこと。

○　全ての方が当事者意識をもち学校と行事を作り上げることで達成感もある。

ウ　課題について

○　後継者育成について、活動の楽しさを伝え広げることで仲間が増える。また、子どもたちが将来やってみたいと思うような姿を見せてもらいたい。

○　学校の主体性と地域の思いのバランスを図ることについて、今後も学校と地域が十分に話合い、モデルを示してもらいたい。

⑵　宮崎県宮崎市木花地域婦人会の事例発表

ア　活動のよさ

○　「誰も津波で死なせない」を活動の原動力として、住民の声に即対応し、現実問題として見つめ直し、組織構成づくりがなされている。

○　防災防犯の取組をコミュニティの原点とし、集落、住民のことを把握し、対応策を必要に応じて変更する弛まぬ努力と訓練の積み重ねが意識の向上と絆づくりにつながっている。

⑶　宮崎市教育委員会の取組

○　学校における津波被害防止に対する検討委員会の設置

○　各学校に防災主任の配置と地域住民も参加したタウンミーティングの開催

3　終わりに

○　地域と子どもをつなぐ取組を考え、実行に移さなければ意識は変わらない。

○　地域の方とは「人見知りより顔見知り」へ、そして地域の核となる人材へ。